

編集後記

明治学院大学で教えることとなった二十年前、宮沢賢治生誕一〇〇年を契機に多くの出版物やイベントによってにぎわっていた。「注文の多い料理店」の仏訳とともに、当時の私にとって翻訳論に携わるきっかけともなった。その後の宮沢賢治研究の深化を反映する生誕一二〇年特集を本誌で組むことができたのも、もうれしく、執筆者の方々、そして編集に尽力していただいた英文学科の富山英俊教授にただ感謝するばかりである。特集については富山教授による後記をご覧いただきたい。

言語文化研究所の二〇一六年度の活動について、ここで簡単な紹介をさせていただきます。九月には、ニース・ソフィア・アンティポリス大学のガブリエル・ガロゾ准教授を講師に招き、人文・社会科学の研究成果が社会ネットワークによって

どのように公開されているのかを検証する「デジタル時代における学術的レトリクルール」と題された講演会が催され、ニース大学と明治学院大学を結ぶパートナーシップの幕開けとなった。また、十一月には英国の作曲家マーク・アンソニー・ターネジ氏を中心に「同時代のオペラ、音楽を考える」をテーマにした討論会、及び、芸術学科のローランド・ドメーニグ准教授をはじめ、多くの研究者が集まり、海外における日本映画の研究を紹介するシンポジウムが開かれた。さらに、十二月には多くの演出家、演劇評論家や研究者によるシンポジウム、「アングラ演劇の成果と課題」が好評を博した。なお、三月には、エッセイスト・写真家のフリギエジ教授（バル・イラン大学）と舞踏の名手として知られるフェルトマン教授（ニューヨーク大学）によるパフォーマンス・講演が行われることとなっている。

来年度の活動に関しては、新規の読書会としてジョルジュ・ペレック研究会や

各学科と連携を図りながら多くの講演・シンポジウムが企画されている。本誌の特集としては、フィクション論における語り手の存在論的身分を巡る論争や「声」と「叙法」の識別など、ポエティックの分野で近年練り広げられてきた議論を念頭において特集「語りの声」を組む準備に入っている。今後も本誌が多様な考察の場になることを願い、期待していただければと思う。（ジャック・レヴィ）

*

二〇一六年は、宮沢賢治生誕一二〇年であった。本号は、研究所にとつて一六年度の刊行物だが、発刊は一七年三月であるので、特集名は「二〇一六宮沢賢治生誕一二〇年」とした。

「言語文化」で宮沢賢治特集を組むのは、三回目である。一九八四年刊行の第二号は「宮沢賢治歿後五〇年」、九六年刊の第一三号は「宮沢賢治生誕一〇〇年」特集号であった。いずれも、詩人・児童文学作家・フランス文学者・賢治研究者

である本学フランス文学科名誉教授、天沢退二郎氏の企画によるものであった。

宮沢賢治の多面的な諸活動への旺盛な関心と研究は、生誕一〇〇年の一大ブームの頃ほどではないが、堅実に継続している。とくに『校本宮沢賢治全集』編集方針をさらに徹底させ、賢治草稿すべての改稿過程の綿密な解説・記載を含む『新校本全集』の刊行（九五―〇九年）は、その基盤となってきた。今特集は、主題としては詩と宗教に焦点を当てたが、宮沢清六・天沢退二郎・入沢康夫・奥田弘の諸氏と並び、その編集委員をされた栗原敦氏と杉浦静氏から、また多彩な執筆陣からご寄稿をいただくことができた。

栗原敦氏は、実践女子大学教授であり（この三月で退官されるが）、「宮沢賢治学会イーハトーブセンター」の代表理事も務められた。「賢治学会」は、広く賢治の愛好者と研究者の集まる場であり、生地岩手県花巻市の施設「宮沢賢治イーハトーブ館」に本拠を置き、研究・資料収集等を行い、各地での研究発表・講

演・公演等を組織している（www.keiji.or.jp）。ともにかつて本学で教えられた入沢康夫氏と天沢退二郎氏は、その学会でも旺盛に活動され、現在はそれぞれ顧問と参与のお立場にある。

栗原氏は、主著は『宮沢賢治 透明な軌道の上から』（新宿書房）であるが、論集等の編著もあり、『宮沢賢治のオノマトペ集』（ちくま文庫）を監修し、天沢氏・杉浦氏とともに『図説 宮沢賢治』（ちくま学芸文庫）を編集されている。さらに、『新校本全集』に基づきつつ一般読者向けであるテキストの提供を目指して刊行が始まった『宮沢賢治コレクション』全十巻（筑摩書房）は、入沢氏・天沢氏の監修、栗原氏・杉浦氏の編集によるものである。栗原氏は今回は、とくに宗教や農村実践に関して賢治の精神史をあらためて展望する論考を寄せてくださった。

杉浦静氏は、大妻女子大学教授。栗原氏と同様に、宮沢賢治学会イーハトーブセンターの代表理事も務められた。主著は、賢治詩草稿の改稿・編集過程を細密

に考究する『宮沢賢治 明滅する春と修羅』（蒼丘書林）。本号には、文語詩「（われはダルケを名乗れるものと）」に関する論考を寄せられた。なおこれは、雑誌『文学』二〇一六年一、二月号（岩波書店）に発表された論文「宮沢賢治とダルケ」の続編であり、ドイツの仏教者、パウエル・ダルケが登場する諸作品の検討の一環であるが、杉浦氏は、ダルケによる大乘仏教軽視への賢治の反発、を根本の主題として認めている点を記しておきたい。

続く吉田文憲氏は、近年では『生誕』（思潮社）などで知られる詩人だが、賢治にも長年継続的な関心を示され、その一部は『宮沢賢治 妖しい文字の物語』（思潮社）、『宮沢賢治 幻の郵便脚夫を求めて』（大修館書店）の二著に纏められている。本特集には、「文字のざわめき」というイメージを焦点として、賢治作品のことばの感触を自在に語る論考をいただけた。

平沢信一氏は、明星大学教授。賢治研究者であり、著書に『宮沢賢治 遷移の

詩学」(蒼丘書林)がある。賢治には絵画作品もあり、その一部はよく紹介されるが、今回平沢氏は、賢治の原稿中にある戯画・肖像画などを、賢治草稿という謎に満ちた場所の一面面として論じられている。

続く、京都の浜垣誠司氏は、ご職業は精神科医だが、熱心な賢治研究者として知られ、そのホームページ「宮沢賢治の詩の世界」は、詩草稿の一覧、歌曲の音声ファイル、ブログでのさまざまな主題の論究など、質量ともに賢治関係では圧倒的である(www.jhatov.cc)。本号掲載の多岐にわたる論考では、妹トシ追悼の心的過程への精神科医らしい関心から、死者を探索する行動、一人を祈ることへの葛藤、詩「青森挽歌」に現れるエルンスト・ヘッケル像などを論じられている。本学からの執筆者として、文学部芸術学科の岡本章教授は演劇人でもあり、演出家として「錬肉工房」を主催されている。かつて現代能「春と修羅」を上演され、その記録は本誌三〇号(一三年三月刊)

に、「現代能『春と修羅』上演と討議」宮沢賢治・能・現代芸術」台本「春と修羅」として掲載されている。今回は、その試みをオノマトペの問題を中心に改めて検討するエッセーを寄稿された。

ついで英文学科准教授、貞廣真紀氏は、専門はメルヴィルの気鋭のアメリカ文学者であるが、賢治にも強い関心をおもちで、本号掲載論文では、非人称的・集合的生への希求とそれへの抵抗、他者の死をめぐる全体性と個別性の葛藤、その同じ葛藤の自死における展開、といった主題をめぐって賢治作品を論じられている。富山(英文学科教授)は、近年発表した、賢治とキリスト教との接触の諸相を扱う論文数点への補論を、掲載させていた。

なお、本号表紙の図版は賢治草稿の一枚だが、拙論の第三セクションが扱う箇所である(『新校本全集』の「草稿通観」では一連番号「三一八裏」)。賢治の草稿ではしばしば、数次に亘り加筆修正が行われるが、それらほときに同一紙葉上で

地層のように重なる。それらを発掘・解説した生成過程はすべて、『新校本全集』の校異篇に記載されている。それらの生原稿は現在、花巻市の宮沢賢治記念館に保存されているが、研究上必要な場合は、その複写の送付を依頼できる。今回、表紙および平沢氏論文中での図版としての使用を許可してくださった記念館に、ここで謝意を記したい。

今回は残念ながら事情によりご寄稿が適わなかった天沢退二郎氏は、先に述べたように宮沢賢治学会イーハトーブセンターの現在は参与であり、かつては代表理事を務められた。じつは今号の執筆陣は、お一人を除けば他はみな賢治学会の会員である。私事を述べれば今号の編集担当の富山は、かつて天沢氏の勧めにより学会に加わり、国際大会企画委員や編集委員などの各種の活動に参加して、現在は巡り合わせて理事の代表をしている経緯があり、本特集もいわば天沢氏の仕事の余波のごときもの、であることを記しておきたい。

(富山英俊)